

# 警官はなぜ賄賂を取るのか

——カザフスタンの事例——

岡 奈津子

「警察」という言葉から連想されるのは、どんなイメージだろうか。交番に連れてこられた迷子をやさしく慰めるお巡りさん、危険を顧みず凶悪事件の犯人を追う熱血刑事、あるいは取調室で容疑者に自供を迫るキレ者の捜査官を思い浮かべる人もいるかもしれない。日本でこうしたステレオタイプが定着したのはテレビドラマの影響だろう。日常生活では、一般人が警察とかかわりを持つ機会はそれほど多くない。

旧ソ連地域における警察のイメージは、これとはかなり異なっている。警官はしばしば、法の遵守や治安維持ではなく私腹を肥やすために働いているのだ、と思われている。実際のところ、違反や犯罪のでっちあげによる強請が行われているのは周知の事実だ。他方、正規の罰金を払うよりカネも時間も節約できるという理由で、自分から賄賂を渡す人も少なくない。また、腐敗した警察は庶民の批判の対象だが、就職先としては魅力がある。安定した給料や福利厚生に加え、「副収入」が期待できるからだ。こうした警察の実態は、程度の差こそあれ、多くの開発途上国に共通する問題といえよう。

このレポートでは、旧ソ連諸国のひとつであるカザフスタンを事例として、治安維持および徴税にかかわる国家機関の腐敗を取り上げる。カザフスタンの一般市民は日々の生活を送るうえで、あるいは工作上、警官、税務署や税関の職員とどのようなかかわりを持ち、また彼らをどう評価しているのだろうか。インタビューから浮き上がってくるのは、これらの国家機関における「常識」としての贈収賄と、それを前提とした行動や思考様式である。

本稿は筆者が2011～16年、カザフスタン最大の都市アルマトゥで実施した聞き取り調査に基づいている。政府高官の汚職スキャンダルとは異なり、一般市民による賄賂のやり取りは、当事者が提供する情報に依拠

せざるを得ない。ここで紹介する人々の語りには、記憶違いや若干の誇張も含まれているかもしれない。しかし多くのインタビューからは、一定の行動パターンや共通認識が浮かび上がってくる。証言にある賄賂の金額は必ずしも正確ではない可能性があるが、「相場」を示すために引用した。なおカザフスタンの通貨テンゲの米ドル換算額は、金銭の授受が行われた時期の交換レートを元に、おおよその金額を算出した。また、インタビューに登場する人名はすべて仮名である。

本論に入る前に、カザフスタンの治安機関について簡単に説明しておこう。

カザフスタンの警察機構は刑事警察、行政警察、移民警察からなり、行政区域（州および首都アスタナ、アルマトゥ）ごとに、内務省の出先機関である内務局の管轄下に置かれている。一般市民が最も頻繁にみかけるのは、路上でパトロールを行う警官だろう。ソ連時代の交通警察（GAI）はカザフスタン独立後も残されていたが（名称は変更）、2013年5月、治安警察とともに行政警察に統合された。しかし一般市民はいまでも旧交通警察を「ガイ」と呼んでいる。移民警察という名称は日本ではなじみがないが、自国民、外国人を問わず、国内外の移動と居住実態を管理するのが主な仕事だ。腐敗取り締まりを担当する国家機関は、頻繁な組織上の変更を経て、現在は国家公務汚職対策庁汚職防止局がその任務にあっている。ただし日常会話では旧称である「財務警察」がしばしば使われる。本稿では便宜上、「交通警察」「財務警察」を用いることとする。ソ連時代の政治警察である国家保安委員会（KGB）の系譜を引くのが、大統領直属の国家保安委員会（KNB）である。なお徴税は財務省国家歳入庁の管轄だ。

## ●交通警察

カザフスタンの都市部では、道端で人が片手をやや下向きに突き出している光景をよくみかける。タクシーを止めようとしているのだ。とはいってもその大半は正式な認可を受けていない「白タク」である。小遣い稼ぎが目的のドライバーもいるが、本業にしている人も少なくない。

いまから数年前、師走半ばのある日のこと。当時アルマトゥに滞在していた筆者は、自宅周辺で白タクに乗り込んだ。

「警官が多いですねえ。独立記念日（12月16日）の式典に備えた警備かな？」

運転手に話しかけると、おどけた調子で返された。

「彼らだって、新年を迎えるにはなにかとお金がいるからね」

同じころ、別のタクシーでインタビュー先に向かう途中、道を一本間違えたことに気づいた運転手が、車道の真ん中でぐるっと方向転換をした。以前、知人がそれで交通警察に咎められたことがあったので、大丈夫かと聞くと、彼はにやっと笑った。

「きょうだいが交通警察で働いているんだ」

交通警察の取り締まりが賄賂目的だというのは、一般市民のあいだでは常識だ。交通規則に違反した場合はもちろんだが、ドライバーに落ち度がなくても恣意

的な取り締まりの対象となることがある。そんなとき、ドライバーの側が身の潔白を証明するのは難しい。正規の罰金のほうが高くつく、一連の手続きが煩雑で時間がかかる、免許を没収されたら不便、などの理由で、大半の人は賄賂を払うことを選ぶ。

他方、警察に強いコネがあれば怖いものなしだ。警官に難癖をつけられたり、自分がルール違反をしても、電話一本で見逃してもらえるからだ。

ちなみにコネがなければ、他の方法で自衛する手もある。「デートに急いでいるんだ、今日プロポーズするんだよ」とか、「私、いま臨月なんです。あっ、陣痛がきたみたい！」などと一芝居うって、賄賂の要求をかわしたという話を披露してくれる人もいた。警官は意外と人情に厚いらしい。

筆者が話を聞いたなかで一番のつわものは、転んでもタダでは起きなかった40代の女性だ。

「パトカーのフロアマットの下に2000テンゲ（約11ドル）入れろと言われたから、そのとおりにしたんだけど、そこに5000テンゲ札があったから、もらっちゃったわ」

## ●免許を手に入れるには

警察が賄賂をとるのは道路交通法違反に対してだけではない。免許の取得や車両登録なども、しばしば贈収賄の温床となっている。

免許をどうやって取得するか。自動車教習所に通い、筆記と実技の試験を受けるのが公式なやり方だ。しかし実際には、賄賂を払って試験にパスした、免許証そのものを買った、あるいはコネを使って入手したなど、様々なパターンが存在する。

2017年3月、2人の若い女性がインスタグラムに投稿した写真が物議を醸した。カネやコネで免許証を手に入れたことを得意げに公言したからだ。

最初に注目を集めたのは、アイゲリムという名の女性。車の座席に座り、免許証を左手で持って正面から撮影している。長く伸ばした爪にはピンクのマニキュア。写真の下には絵文字混じりで、無邪気にこう書いてあった。

「免許証を買ってもらっちゃった。やったー（拍手）。パパ、ありがとう♥♥♥」

困ったのは父親だ。娘の姓名、生年月日、顔写真が知られてしまったため、釈明を迫られたのである。彼



アルマトゥ市内で交通整理をする警官（2011年筆者撮影）

は、娘のコメントは免許取得にかかった費用を親に負担してもらったという趣旨だった、と弁解した。免許証を発行した内務省も、アイゲリムが受験した事実を確認したと公表し、火消しに努めた。

するとまもなく、今度は別の女性がインスタグラムに投稿。彼女は同じく免許証の写真に絵文字満載の文章を添えているが、アイゲリムと異なるのは、それをコネで手に入れたことを自慢している点だ。

「こんなに早くもらえるなんて思わなかった（驚）。コネは万能」

この2人の女性がどうやって免許を取得したのか、本当のところはわからない。

しかしアイゲリムの父親や内務省の説明を信じる人はほとんどいないだろう。彼女たちの投稿が話題になったのは行為が珍しいからではなく、みんなが知りつつも黙っていることを実名入りで不特定多数に公言した、その浅はかさと同防備さゆえである。

ではここで、実際に免許をカネで手に入れた人の証言をひとつ紹介しよう。アルマトゥ郊外で成人した一人息子と暮らすエレナは、自分も息子も、教習所のスタッフにカネを渡して試験をパスしたという。彼らは裏で警察と通じているのだ。

「最初はちょこちょこっと（キーボードを）叩いたけど、試験監督が来て入力して、はい、正解。監督は試験会場にいて、全員のところをみて回るんだけど、お金を払った人にだけ回答を教えるってわけ」

賄賂を払った人たちの説明はこうだ。合格するのに必要な知識や運転技術があっても、カネを渡さなければ筆記試験の解答を操作されたり、ごく些細な運転ミスを理由に不合格になる。何度も試験を受けなおすよりも、賄賂を払ったほうが結局、お金や時間の節約になる。

なお親戚の口利きで免許証を手に入れたという筆者の知人は、試験会場に行ったものの、パソコンの前で座っていただけだったという。また別の知人は、頼んでもいないのに、警官の友人が「誕生日プレゼントだよ」といって免許証をくれたとか。運転免許証は、あたかも警察が自由に販売・譲渡できる商品のように扱われているのだ。



アルマトゥ市内のキオスク（2016年筆者撮影）

### ●魚心あれば水心

控えめで物静かな風貌の女性イリーナは、アルマトゥ郊外で食品や雑貨を販売する小さなキオスクを営んでいる。脳卒中を起こして働けなくなった夫、介護が必要な老母、息子2人との5人暮らし。息子たちもすでに働いているが、家族の世話をしながら家計を支えるために始めたのが、いまの仕事だ。

イリーナの店には警官、税務署員、そして厚生省の衛生・伝染病局の職員がやってきては、規則違反や衛生上の不備を口実に袖の下を要求する。頻度はそれぞれ年に1~3回、1回に要求される金額は3000~1万テンゲ（約20~68ドル）程度だが、イリーナは金銭的負担よりも、不快な気分させられることが嫌だという。

「言いがかりをつけようと思えば、理由はいくらでもみつけれられますよ。探せば必ずね」

警察にとって格好の口実は、未成年に対するたばこやアルコールの販売だ。キオスクのすぐそばにあるアパートには常連客が多く住んでいる。イリーナは住民の家族構成や名前を知っており、顔見知りの子どもが親のお使いだといって買い物に来ることもある。酒やたばこを未成年に売るのは違法には違いないが、いつも厳しい態度をとってはい顧客を失いかねない。さらに警察はおとりの少年をわざと店によこして、こうした商品を買わせようとすることもある。イリーナは、販売禁止商品リストの変更がすぐに周知されないのも、故意に違反者を作りだすのが目的ではないかと疑っている。

警察は、自分たちの気に入らない商品の販売を妨害することもある。

美容学校教師のマリヤの夫は、テレビショッピングで輸入品を扱っている。2013年にビデオカメラ内臓のペンを売り出したところ、大人気商品となった。賄賂をせびる警官を撮影するために購入した人がたくさんいたのである。これに腹を立てた警官たちは夫のところに来て、違法な商品を販売した罰金として1000ドルを要求した。実際にはそんな法律は存在しなかったのだが、「しょっぴくぞ!」と脅されて怖くなった夫は支払いに応じた。しかし4万テンゲ（約260ドル）しか渡さなかったため、その後しばらくの間、「残りの金を払え」としつこく付きまとわれたという。

とはいえ、小売業者や飲食店の店主は必ずしも一方的な被害者ではない。カネや商品を提供したり、自分の店で接待したりして、警官や税務署員と持ちつ持たれつ関係を築くこともあるからだ。

ショートヘアにきりりとしたメイクのマラルは、元小児科医。押しの強さがいかにもビジネス・ウーマンという印象を与える快活な女性だ。ソ連崩壊後に貿易や小売業を始め、現在は外国製化粧品の販売をしている。

「1990年代には、ヘルメットと自動小銃で武装した財務警察があからさまにカネを要求してきましたよ。もちろん（言われたとおりに）払いましたけど。いまは顔見知りも多いので、バザールで買い物をするみたいに交渉します。『2000ドルよこせ』と言われたら、こっちは『600ドル』って言い返す。私は中国によく行くので、値引き交渉には慣れているのよ（笑い）」

マラルは、以前は収入を過少報告したこともあったが、いまはすべてオープンにして、きちんと納税している、と強調した。しかし、どうしても書類上のミスが生じてしまうことはある。

「彼ら（税務署）はこっちの収入を知っていますからね。収入が多ければ高い金額を要求してきます。違反しているときはもちろんですけど、違反がなくても援助を求めてくる。上司が来るから（接待費を出して）助けてくれ、とかね。そしたらもちろん協力します。お酒とか、現金とかで。知り合いになっておけばなにかと便利ですから。『友達』を持つのはいいことよ、あの人たちのことは（本当の意味で）『友達』とは呼べないけれど（笑い）」

## ●移民警察

出入国管理や外国人登録を行う移民警察。外国人は手続きを誰かに代行してもらわない限り、必ずかわりを持つことになる機関である。

グラフィックデザイナーのヴィカは長年アルマトゥに住んでいるが、国籍はロシアだ。定住外国人は居住許可証の定期的な更新を求められる。

「証明写真を提出したら、『切り方が間違ってる、0.5ミリ長さが足りない』って。そんなささいなことでも、ばかばかしいったら。申請を受理してほしいなら、ペリメニ（ロシア風ぎょうざ）を2袋買ってきて、いま昼休みだから、ですって。買いましたよ。その次は、携帯電話の通話料をチャージしろって言われました」

ヴィカのケースは露骨な強請だが、申請者自身が「謝礼」を申し出ることもし少ない。手続きがしばしば煩雑で不透明なため、時間がかかり、イライラさせられるからだ。カネやコネですばやく解決しようという誘惑に駆られるのも無理はない。

筆者自身、カザフスタンで外国人登録にてこずったことがある。現行制度では、日本国籍なら空路の場合、入国後90日間は移民警察での登録は不要だ。これは短期滞在者にはありがたい制度だが、長期滞在の場合はむしろ災いした。当面は登録不要だからという理由で、担当者に門前払いされてしまったのだ。しかし居住登録をしないと納税者登録番号が取得できず、その番号がないと銀行口座が開設できない。

移民警察に行ってみると、申請受付窓口の前には長蛇の列ができており、誰が最後なのかよくわからない。とりあえず並んでようやく順番が来たので、顔がやっとみえるくらいの小さな窓口の向こうにいる担当者に質問したが、「日本人？ 3カ月後に来な」の一点張り。大勢の申請者でごった返すなか、事情を聞いてもらうことはまず不可能だった。

困り果てていたところを助けてくれたのが、元内務省職員の知人だ。彼女は電話一本で昔の同僚たちに話をつけ、警察にも同行してくれた。そのおかげで、待ち時間なしで手続きが終了したのである。非公式なルートを使いたくなる庶民の気持ちが、よくわかるというものだ。

在住外国人のなかでも、より不安定な立場におかれているのが出稼ぎ労働者たちだ。カザフスタンへは、多くの労働者が近隣の中央アジア諸国などから仕事を

求めてやってくる。その数は推定100万人超とも言われるが、そのほとんどが独立国家共同体（CIS）加盟国間の査証免除制度を利用しつつ、観光や親族訪問の名目で入国し、非公式に就業している。警察はしばしばこれを黙認、あるいは事実上庇護する代わりに、賄賂を徴収しているのである（参考文献①）。

カザフスタン国民の場合、移民警察との接点のひとつは居住地登録である。教育や医療などの公共サービスは基本的に登録した住所に基づいて提供されるが、別の地区にある学校や診療所を利用したい人々もいる。そういうときには、他人にカネを払ってその人の住所に登録させてもらうという方法がしばしば使われる。なかには自宅に10人以上も登録するケースもあるそうだが、そんな人数の赤の他人が同居するのはいかにも不自然だ。しかし、役人に袖の下を使えば見逃してもらえるのである。

ただし今後は、実体のない居住地登録に歯止めがかかるかもしれない。2016年末、政府はテロ対策の名目で制度を厳格化した。2017年1月以降は、一時的な滞在先であっても登録が必要だ。新しいルールの下では、10日以上未登録で居住していると警告を受け、1カ月以上だと罰金が科される。また、居住実態がない人物を登録した場合も罰則の対象となる。

なお、居住地登録は移民警察の管轄だが、窓口は「住民サービスセンター」（TsON）となっている。このセンターが2007年に作られた目的のひとつは、各種の住民サービスをワンストップで行うことを可能にし、役人が収賄する機会を減らすことにあった。TsONができて便利になったという肯定的評価は確かにある。しかしここでも結局、カネを渡して手続きを早めることが行われている、と証言する人は多い。

## ●税関

賄賂の要求という点では、税関も警察に負けず劣らず評判が悪い。

個人事業者の多くは、割安な商品を求めて近隣諸国に買出しに行き、国内で売りさばいてささやかな収益をあげている。ゴールド系の派手なファッションに身を包んだディーナもその1人だ。見た目からはやや意外に感じるが、もともとは学校で教鞭をとっていたという。ソ連崩壊後、教師の安月給に見切りをつけ「ビジネス」を始めた。2002年ごろまでの数年間、ビシユ

ケク（キルギス共和国の首都）とアルマトゥを行き来していたが、儲けが少なくなったことに加え、しつこく賄賂を要求する税関や警察に飽き飽きして、この商売から手を引いた。

「買い出しに行くたびに、毎回必ず『貢物』（dan'）を払わされた。税関だけじゃなく、麻薬取り締まりの警官たちにも必ず引き止められる。週に2回は行き来していたから、顔を覚えられてね。慣れてくると交渉で値下げしてもらえるようになるけれど、新入りの職員が来ると、また高い金額をせびられる。交渉が成立しないと困るのはこっちなんです。商品を押収されてしまうから」

会社員として、税関とかかわりを持った人たちの話も聞いた。

航空運輸会社勤務のセルゲイは、以前、別の会社でロシアからゴムタイヤを輸入していた。カザフスタンとロシアは現在、ユーラシア経済連合を結成しており域内貿易は無関税だが、当時は通関手続きが必要だったのである。

「会社から税関に行けと言われて、窓口書類を提出したが受理してもらえない。私の後ろに並んでいる人たちからは受け取るのに。どうして受け取ってもらえないんですか、と聞いても、忙しいの一点張りですね」

セルゲイは結局、そうやって2日間行列に並んだ。そうこうしているうちに、他の人たちが実はブローカーで、顧客の代わりに賄賂を払っていることを知る。セルゲイもブローカーの若い男と知り合いになり、言われたとおりに書類の間に現金を挟みこんで、税関に渡してもらった。税関は顔なじみからしかカネを受け取らないのだ。

別の例をあげよう。20代の青年ヴィクトルは、家庭用化学製品を扱う会社で倉庫担当として働いている。ヨーロッパから鉄道で輸入された商品は、カザフスタンに到着すると臨時倉庫に置かれ、そこでブローカーたちが通関手続きを代行する。税関職員への「心づけ」はブローカーに一任されている。もしブローカーを使わずに自分でやろうとしたら、通関に1週間以上はかかるという。

また、貨物の車両を隣り合わせにしてもらうだけのために、会社は10万テンゲ（約680ドル）の賄賂を払っている。離れていると同日中に荷下ろしできないからだ。

「別に高くはないですね。臨時倉庫に4日以上置いておくと、1両あたり1日100ドルかかりますから。これは公式な費用なんですよ」

ヴィクトルの会社が販売する商品の価格には、こうした公式・非公式な費用が上乘せされている。ちなみに、賄賂を払うための経費は裏帳簿に計上される。税務署もそれは百も承知だ。だからこそ社長は税務署に定期的に「謝礼」を渡し、職員をサウナで接待したりして、良好な関係の維持に努めているのである。

### ●狼は満腹、羊も無傷

カザフスタンの人々に贈収賄について

インタビューをすると、警官や役人、医者などから金銭を露骨に要求されたことについては、憤懣やるかたない調子で語ってくれる。自分から渡した場合は若干のやましさをともなうものの、率直に話してもらえることが多い。他方、自身の収賄経験を語る人に出会うのはまれだが、時折、そうした貴重な機会に恵まれることもある。

アミルジャンは大学を中退してから軍隊に入り、除隊後に大学に入りなおした若者である。志願したのは国家保安委員会傘下の国境警備隊だ。アミルジャンが入隊した2009年当時は、国境警備隊は密輸業者や密入国者から多額の賄賂を徴収できる、うまみのある仕事だったという。しかし彼が志願した最大の理由は、エリート部隊なら除隊後にいい就職先が見つかると思ったからだ。

アミルジャンたちの任務は、カザフスタン南部の対ウズベキスタン国境地帯で、税関からやや離れた人気がないエリアを警備することだった。そこでは徒歩で国境を越えることができるが、警備兵にみつかったら拘束されるか、最悪の場合、狙撃される可能性もある。

「そういうリスクを避けるために、密入国者は仲介人に頼みます。仲介人は国境地域に住んでいる地元住民で、自分自身が密輸に手を染めています。仲介人が依頼人から受け取るのは3000テンゲ（約20ドル）で、そのなかから我々に1000テンゲを渡す。残りは自分の取り分というわけです。我々は密入国者と直接交渉はしません。おとり捜査の仕掛人かもしれないですから」



カザフスタン側からみた対ウズベキスタン国境検問所 (2005年筆者撮影)

仲介人が密輸や密入国の手引きで儲けることができるのも、国境警備兵との不文律を守ってこそだ。それを破ったときの代償は大きい。あるとき、この仲介人が兵士たちにカネを払わずに、大量の商品をウズベキスタンから持ち込もうとした。怒ったアミルジャンたちは、近くの部隊を呼び寄せ、暗闇で一緒に待ち伏せをした。仲介人が国境を越えた瞬間に拳銃を持って立ちほだかり、500万テンゲ（約3.3万ドル）相当の菓子を押収。その半分は自分たちの胃袋に収め、250万テンゲ分を押収物として申告した。

「平らげるには時間がかかりましたね」

税関職員の収賄については、以前、拙稿（参考文献②）で紹介した人物に再登場してもらおう。2000年代半ば、対キルギス共和国国境の税関に勤めていたヌルランだ。彼によれば、賄賂の相場は持ち込まれる荷物の評価額の10%。ひと月あたりの「儲け」はおおよそ2000ドルで、公式な給与の7倍に相当する金額を袖の下で稼ぐことができたという。

ひとつの班の構成員は、主任1名、職員8名の計9名。主任の取り分は平職員の2倍だ。税関の上司に一定の金額を上納するほか、地元の検察、財務警察、国家保安委員会の出先機関にも、儲けを分配しなければならない。ちなみに上述の2000ドルは、こうした上納金や分配金などを除いた手取り額である。

この方式は税関職員にとっても、彼らの収賄を見逃す代わりに分け前に預かっている人たちにとっても好都合だ。ヌルランはロシア語のことわざを引いて、こ

う評した。

『狼は満腹、羊も無傷』というわけだ」

ちなみにヌルランが税関を辞めたのは、汚職撲滅キャンペーンの一環として実施された抜き打ち検査で、アルマトゥから派遣された財務警察に摘発されたからだ。しかし彼は一緒に捕まった同僚と共に、財務警察に1人あたり1500ドルを払って刑事罰を逃れた。自主退職扱いとなったので、再び税関に就職することも可能だという。収賄で逮捕されたら賄賂を払って事なきを得るとは、まるで冗談のように聞こえるが、筆者はいくつかそうした事例を耳にしている。まさに「事実が小説より奇なり」だ。

### ●「ピラミッド」と「システム」

警官や税関職員はなぜ賄賂を取るのか。給料が低すぎてそれだけでは生活できないからだ、というのが通説だ。しかし現地の人々の理解では、収賄の理由はもっと構造的なものである。

内務省や国家歳入庁などの公的機関に就職する際には、しばしば、しかるべき人物にカネを渡さなければならない。首尾よく職に就けたら、今度は自ら賄賂を取る。いわば、就職のために支払った「初期投資」を回収するのである（参考文献③）。集めた賄賂は仲間と分け合いつつ上司にも上納し、その一部はさらに上の幹部に渡される。幹部はそれと引きかえに、部下の収賄を黙認あるいは奨励する。

上述のヌルランは就職の際、税関に勤める岳父を通じて4000ドルの賄賂を支払った。毎月2000ドルの非公式収入が見込めるのだから、この「投資」は非常に効率がいい。

治安機関における職の売買と収賄の関係について、より詳しく語ってくれたのが元内務省職員のカニヤルだ。彼は大統領の親衛隊に所属し、大統領公邸や別荘などの警護を担当していた。2000年代初頭に除隊した後、不動産関係の事業を手がけていたそうだが、筆者がインタビューしたときは仕事がうまくいっていないようだった。妻と6人の子どもを抱え、生活は大変だったはずだ。しかしカニヤルの落ち着いた威厳のある物腰は、経済的な困窮を感じさせなかった。

「機関（organy）、つまり内務省、国家保安委員会、財務警察、検察、税関などのことですが、こうした組織に就職するにはカネがいる。相場は2000～3000ドル。

内務省で働いている私の元部下たちは、昇進するためにも同じような金額を払っています」

カネでやり取りされているとはいえ、公職は市場で売られている商品とは異なり、一度購入すればずっと所有できるわけではない。その地位を保証してくれるのは、あくまで「売り手」であるパトロンであり、組織ではない。

「カザフスタンではあつという間に、簡単に異動がある。カネで就職しても上司がクビになれば、全部おじゃんになってしまう。そうしたら『ピラミッド』を始めから作り直さなければならない。だからみんな急いで元を取ろうとする。つぎ込んだカネの分より多く（賄賂で）稼ごうというわけですよ」

カニヤル自身はソ連時代に厳しい選抜を経て採用された。大統領の警護という職務の性格上、一般市民から賄賂を取る機会もなかったという。しかし彼もまた、同僚と共に上司である大佐にカネを払っていた。

「毎月、自分たちの給料からカネを出して、上に渡していました。強制ではありません。でも、みんなこのシステムを承知していますから」

つまり、部下たちが上司の意向を忖度するのだ。

公的機関における収賄をテーマにインタビューすると、ほぼ必ずといっていいほど耳にするのが、カニヤルも言及した「ピラミッド」（piramida）と「システム」（sistema）である。

「ピラミッド」とは、組織のトップを頂点とし、それぞれのレベルの上長が部下を支配する重層構造を指す。上司は人事や予算配分を通じて部下に影響力を行使する。部下は、職を得るための「代金」、一般市民から徴収した賄賂、さらに公式な給料の一部などを上納し、それと引きかえに庇護を受ける。個々の職員が腐敗に手を染めるのは、単に私利私欲に走っているからだけではない。カネを下層から上層に吸い上げていくピラミッドの構成員となった以上、個人の意思でこの非公式なルールに抗うことは非常に困難だ。

ロシア出身の社会学者アリョーナ・レデニョヴァは、「システム」はロシア国民なら誰でも知っているが、定義が難しい概念だという（参考文献④）。なぜなら、それが公式・非公式なルールからなる不明瞭かつ不透明な統治形態であるからだ。個人的関係や非公式なカネのやり取りが物事を左右する「システム」は、かつてロシアと共にソ連邦を構成していたカザフスタンに

も存在する。筆者がインタビューした人々はしばしば、「システム」を逆らうことのできない非公式な規範、組織内の無言の圧力として捉えていた。

### ●必要経費

カネとコネで就職し、その費用をすばやく取り戻すために収賄に励む。そんな警官が市民の尊敬を集められないのも無理はない。

自分も内務省に勤めていたダニヤルは、いまの警察の体たらくを苦々しく思っている。

「警官は理由もなく逮捕することもあります。もちろん違法ですけどね。パトカーに無理やり乗せて、留置所に何日も入れておく。つまりはカネをせびるんです。逆に警察に捕まりそうになっても、カネさえ払えば無罪放免ですよ。だから犯罪が増える」

ソ連の警察はもっと恐れられていた、と彼はいう。

「我々が就職したころは、身長170センチ以上とか、運動能力とか、厳しい審査がありました。候補の半分は落とされましたよ。ところがいまときたら、あなたも見かけたでしょう、背が低くてでっぷりとした警官。警官に対する人々の態度も変わってしまった。私たちが制服を着て歩いていたら、どんなならず者だって恐れをなしたものです。『サツだ！逃げろ』ってね。いまは相手にもされませんよ」

ただし、警官や税関職員にも同情すべき事情はある。

ソ連崩壊後、急速な市場経済化と緊縮財政により、あらゆる分野で予算が大幅にカットされた。その結果、公的セクターで働く人々の賃金未払いや遅延が生じただけでなく、業務遂行に必要な設備や備品、消耗品が支給されなくなってしまった。そうした事態は2000年代以降改善されてはいるものの、現場で働く人々はいまだにしばしば自己負担を強いられている。

再び、ダニヤルの証言を引用しよう。

「コナエフ（カザフスタン共産党第一書記、1964～86年）時代には軍装品が定期的に支給されました。着古していなくてもね。帽子、コート、靴下から肩章、勲章まで。いまは全部、自分で買わなければならない。専門店に行って注文するんです。その費用はばかになりません」

自腹を切らされる警官の悲哀を、筆者も感じたことがある。

アルマトゥ滞在中、夫が外国人観光客狙いの詐欺に

遭った。1人が近くでわざと財布を落とし、別の仲間が、これは俺のだがカネが足りない、お前が盗んだだろう、財布をみせろと難癖をつけ、その隙にお札を抜き取る、というのが典型的な手口だ。犯人をみつけるのはまず無理だろうとは思ったが、一応、警察に届け出た。数日後に電話があり、容疑者の写真をみせたいからいますぐこっちに來い、という。すぐには無理だということ、筆者が自宅に呼びつけたと思ったのか、その警官がものすごい剣幕で怒鳴ったのである。

「ガソリンは自腹だし、俺の携帯を使って電話してるんだぞ！」

なお、視察や監査と称して現場にやってくる上司や役人の接待費用もばかにならない。その飲食費や宿泊費、交通費などを下っ端の職員が肩代わりさせられるからだ。こうした理不尽な出費を警官や税関職員が我慢しているのも、袖の下を稼ぐ機会が与えられているからこそである。

高いカネを払って職に就き、それを維持するためにも少なからぬカネを使う。警察や税関職員による収賄は、彼らにしてみれば、こうした出費を穴埋めするための合理的な行動なのである。

(おか なつこ／アジア経済研究所 ガバナンス研究グループ)

### 《参考文献》

- ① Davé, Bhavna, "Keeping Labour Mobility Informal: The Lack of Legality of Central Asian Migrants in Kazakhstan," *Central Asian Survey* 33 (3), 2014, pp.346-359.
- ② 岡奈津子「カザフスタンにおける日常的腐敗——フィールドワークに基づく考察——」『アジア研ワールド・トレンド』No.209、2013年。
- ③ Engvall, Johan, *The State as Investment Market: Kyrgyzstan in Comparative Perspective*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2016.
- ④ Ledeneva, Alena, *Can Russia Modernise? Sistema, Power Networks and Informal Governance*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013.